The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

道宣の四種三宝説について
——住持三宝の存在意義を中心として——

戸次顕彰

はじめに

三宝は仏教徒の帰依の対象であるが、仏法僧の各々の定義を論じようとすれば、例えば法は理法か教法かなど、必ずしも一定ではない。特に中国では、『大般涅槃経』や『勝鬘経』の伝来などによって、仏法僧の三宝は一体であるという教説が注目されるようになったことを契機に、南朝梁の『大般涅槃経集解』や隋・吉蔵（五四九—六二三）の『勝鬘宝窟』、日本・聖徳太子（五七四—六二二）の『勝鬘経義疏』などで一体と別相の二種の三宝が論じられ、これらに言及する研究が存する。(1) 一方の北朝においても二種ないし四種の三宝説が見られることが池田将則氏の研究(2)によって知られている。

さらに南北朝における以上のような三宝説の動向は、やがて隋唐の諸師の著作中でも取り上げられ、慧遠（五二三—五九二）の『大乗義章』、智儼（六〇二—六六八）の『華厳孔目章』、基（六三二—六八二）の『大乗法苑義林章』、法蔵（六四三—七一二）の『華厳経明法品内立三宝章』の中で一体・別相・住持などの三種ないし数種の三宝説が論じられている。これらの主な先行研究には、僧宝を中心に慧遠の三宝説を考察した土橋秀高氏(3)、法蔵の三宝説を論じる一色順心氏(4)の論考などがあり、諸師の特徴が部分的に解明されてきた。

一方、初唐の道宣（五九六—六六七）は『四分律含註戒本疏』（以下『戒本疏』）および『釈門帰敬儀』（以下『帰敬儀』）の中で、前述の一体三宝のほか、究極的な真理としての理体三宝、歴史上の釈尊を仏宝とする化相三宝、仏滅後の凡夫でも維持し得る住持三宝の四種の三宝を説くが、その特徴や意義等についてはあまり注目されていない。

本稿は以上の研究動向を踏まえつつ、従来必ずしも注目されていなかった道宣の三宝説を『戒本疏』を中心に考察し、さらに道宣の特色の一端が住持三宝の論述に見られることを指摘したい。

印度學佛教學研究第六十一巻第一号　平成二十四年十二月

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

一　『四分律含註戒本疏』の四種三宝説

『戒本疏』は比丘戒の戒本に道宣が注釈を加えたものであるが、四種三宝説が述べられるのは戒本の「帰敬偈」冒頭の「稽首礼諸仏　及法比丘僧」を注釈する箇所である。道宣は仏法僧の語義解釈をした後、三宝に「衆相」があるとして理体・化相・住持・一体の順に説明する。

一理体者、如二五分法身一為二仏宝一、滅理無為是法宝、声聞学無学功徳是僧宝。二化相者、如二釈迦一道王二三千一為二仏宝一、演布諦教為二法宝一、拘隣等五為二僧宝一。三住持者、形像塔廟為二仏宝一、紙素所伝為二法宝一、戒法儀相為二僧宝一。四一体者、如二常所レ論、唯約二心体一、義分二三相一、如下涅槃説二三宝同性一等上。（卍新纂三九、七三二上）

ここで述べられる各種の三宝を整理すると、理体三宝では仏宝は五分法身、法宝は滅理無為、僧宝は声聞の有学・無学の功徳であるとされる。つまりここでの三宝は、実在するものではなく功徳や真理を指すことが分かる。化相三宝では、仏宝は釈尊、法宝は釈尊所説の四諦の教説、僧宝は初転法輪で帰依した五比丘とされ、歴史順序に基づいた三宝がこれに当たる。住持三宝では、仏宝は形像塔廟、法宝は紙素の所伝、僧宝は戒法儀相とされ、仏滅後も住持し得る三宝となっている。最後の一体三宝は心体に約すとされ、仏性中に法も僧も含まれているとする『涅槃経』「如来性品」の教説を経証とする。

『戒本疏』では以上の四種の三宝を挙げたあと、四種の「本末」「次第」「功用」を順に論じ、「本末」では「四種之中、初めの理を本と為し、餘の三は相に従うが故に末と為すなり」（卍新纂三九、七三二中）と述べ、理体三宝を本とし、他の三種を末とする。

『戒本疏』で道宣が最も多く論じるのは各種三宝の内の仏法僧の「次第」である。理体三宝の次第は「法宝を初と為す」（卍新纂三九、七三三上）として原則的には法を先とする。また「但し理は自ずから顕われず…理は人に由りて彰わる」（同）とも述べ、仏宝が先になるという解釈もできるとする。次の化相三宝では、「仏先法次僧後」（同）という次第が明確にされ、住持三宝では「僧初法次仏後」（同）の次第を示し、最後の一体三宝では「法先僧次仏後」（同、七三三中）とする。

このような三宝の成立次第を論じるのは冒頭に挙げた他の隋唐諸師にも見られるが、道宣には一体三宝と住持三宝に対して諸師とやや異なった見方をしている形跡がある。まず一体三宝について、例えば法蔵は同相三宝を「無始より本有の故に、先後無きなり」（大正四五、六一七中）として道宣の一体三宝に相当する同相三宝に先後関係はないとするが、道宣の場合は「理は実に三無きも、相に随い用て分かつ」（卍新纂三九、七三三上）と述べ、体は心体であるから一体であるが、

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

相が仏法僧の三種に分類されるとして敢えて「法→僧→仏」の次第を示している。

また、より特徴的なのは第三の住持三宝に関する次の文章である。

三住持中、僧初法次仏後者、由二道仮一人弘世途法爾一故、迦竺初達、現二僧儀一也。述二五乗一為二善因一、明二三途一為二悪果一、現二法儀一也。斯法遠大、非二凡小之所一レ開、故表二画像於涼台一、推二其所説一、現二仏儀一也。（卍新纂三九、七三三上）

ここでは、住持の次第は化相の逆で僧宝から法宝・仏宝が開かれると述べる。この背景には「人能く道を弘む、道の人を弘むるに非ざるなり」という『論語』「衛霊公篇」の教説に代表される世間の道理（「世途の法爾」）があることが分かる。それを仏教伝来の観点から見れば、迦葉摩騰・竺法蘭が初めて中国に来た（「迦竺初達」）ことにより僧儀が現れ、これらにともなって次第に教説が伝来し法儀が成立する。この法儀の成立によって、仏法が遠大であり凡小の知る所ではないことを自覚することから画や像による仏宝が成立するという次第を論ずる。

住持三宝を「僧→法→仏」の成立順で見る道宣の説は、他の諸師と比べても道宣の特徴の一つとして指摘できる。三宝の「次第」を明確にしようとする論述は慧遠・基・法蔵にも見られ、この中では法蔵が道宣と同様に住持三宝の次第に言及しているが、[5] 法蔵の場合には憂塡王が釈尊を思仰して仏像を造ったという伝承を例に挙げて住持三宝を「仏→法→僧」の次第で論じており、[6] これは道宣の「僧→法→仏」という順序と異なる。仏滅後には僧から法・仏が開かれるとする点に道宣の三宝観の特徴があるといえる。

『戒本疏』は最後に「功用」の勝劣を論じ、「理宝を勝と為す、常住に由るが故に」（卍新纂三九、七三三下）として、他の三は「体是れ有法なり」（同）と述べ、常住の理体三宝の功用が最も勝れていて、他の三種は有為法であるから理体には劣るという。

また「功用」の末尾には、次のように住持三宝の積極的意義に言及している点にも注目できる。

有人云、住持三宝、末世為レ勝。理在二冥通一、但為二玄徳一。世唯相有、仮レ相開通。濁世鈍情、非レ相不レ動。約レ機接レ俗、信不レ虚也。（卍新纂三九、七三四上）

つまり、末世は濁世であり、衆生も鈍根であるから、相によって三宝を示す必要があり、この点において末世と限定した上で住持三宝を勝と為すという解釈を示している。

以上が『戒本疏』における三宝説の概要である。

二　『釈門帰敬儀』における住持三宝

以上の『戒本疏』三宝説は「次第」「功用」を論じること

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

によって住持三宝説の積極的意義に言及している点に道宣の特徴があると見られる。このような「次第」「功用」の議論は慧遠・基・法蔵にも見られるが、仏教伝来という史的伝承を提示したり、『論語』の表現を用いて住持三宝やその中でも特に僧宝の存在意義に言及していることは道宣の特徴であるといえる。そしてこのような姿勢は『帰敬儀』にも、より顕著な形で論じられている。

『帰敬儀』の中で三宝の相が明らかにされる際には、その初めに「今此の述本は後進の初心に被らす……相は見に随いて起こり、機に随って四位あり」（大正四五、八五六中）とあり、三宝の相状は見る者の機根によって四種に分かれるとして一体・縁理（『戒本疏』の理体に相当）・化相・住持の順で説明していくのであるが、それに先立つこの文章には、『帰敬儀』で三宝を論じる意図が後進の初心者を対象としたものであると明示される。その点で冒頭に挙げた「章」形式の諸師の論述とは異なっていると考えられる。

以上の論述意図を前提とすると、後進者や初心者にとって重要なものとなるのが住持三宝である。以下に『帰敬儀』の住持説を見ていきたい。

四明二住持三宝一者、人能弘レ道、万載之所レ流レ慈。道仮レ人弘、三法於レ斯開レ位。遂使二代代興樹、処処伝弘。匪レ仮二僧揚一、仏法潜没。至レ如三漢武崇盛、初聞二仏名一、既絶二僧伝一、開レ緒斯竭。及三顕宗開レ法遠訪二華胥一、致レ有下迦竺来儀演二布声教一、開レ俗成レ務発レ信帰心。実仮二敷説之労一、誠資二相状之力一、名二僧宝一也。所説名句、表レ理為レ先。理非二文言一、無レ由レ取レ悟。故約二名教説聴之縁一、名二法宝一也。此理幽奥、非レ聖不レ知。聖雖二云亡一、影像斯立、名二仏宝一也。但以群生福浅、不レ及二化源一、薄有二餘資一、猶逢二遺法一。此之三宝、体是有為、具二足漏染一、不レ足レ陳レ敬。然是理宝之所二依持一、有二能遵重一、相従出レ有。（大正四五、八五七下）

ここでは、『戒本疏』と同様に『論語』の表現が依用され、人が教えを伝えていくことによって影像である仏宝の力が増す（「実に敷説の労を仮りて、誠に相状の力を資く」）として迦葉摩騰・竺法蘭による仏教伝来に関する伝承（「迦竺の来儀」）などを挙げ、住持三宝では僧から法・仏が興隆していくことを述べる。また住持三宝は仏法僧いずれも体が有為であり漏染を具足していると定義されている点は、明らかに理体・一体三宝より劣ることを意味しているのであるが、道宣は「理宝（理体三宝）の依持する所」であることによって、これを尊重すれば有を出ることができるとする。各種三宝の「次第」や「本末」「優（勝）劣」を問題とするのは道宣に限ったことではないが、道宣の場合には「末」や「劣」に位置付けられる住持三宝の末世における存在意義に言及しようとする意図が見られる。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

おわりに

中国仏教の諸師が三宝を数種に分類して論じる中、道宣の四種三宝説を見てきたが、その特徴の一つは住持三宝の論述にあるように思われる。道宣の論述は、機根の劣った者を論述対象としており、また像末という時代背景も意識している。この点に「章」形式の諸師の著作とはやや異なった三宝説が展開されているといえる。

当時の中国の仏教者にとっては、歴史上の釈尊を仏宝とする化相三宝には時代・地域という制約によって出会うことができない。また理体三宝は聖者にとって実在するものであるから、凡夫の場合には機根という観点からこれに出会うことも困難となる。このような時・機の事情から住持三宝の意義を宣揚しようとする意図が道宣に見られるのである。特にその中でも「人能く道を弘む」という『論語』の表現を借用して僧宝の存在意義を明確にしていること、また中国への仏教伝来という歴史的伝承を挙げながら論述するという姿勢は他の諸師に見られない道宣の特徴といえる。

1　近年の研究として『涅槃経集解』の一体三宝説に言及した倉本尚徳「『大通方広経』の懺悔思想―特に『涅槃経』との関係について―」（『東方学』第一一七輯、二〇〇九年）がある。

2　池田将則「敦煌出土北朝後半期『教理集成文献』（俄Φ一八〇）について―撰述者は曇延か―」（『地論思想の形成と変容』国書刊行会、二〇一〇年）。

3　土橋秀高「僧宝について」（『佐藤博士古稀記念・仏教思想論叢』山喜房仏書林、一九七二年）。

4　一色順心「華厳教学における三宝説について」（『仏教学セミナー』第三二号、一九八〇年）。

5　法蔵以外の慧遠・基も「次第」に言及しているが、慧遠の場合「修成の次第」（大正四四、六五七中）、基の場合「因果の次第」「随信の次第」（大正四五、三四六中）において僧を初めに置く解釈をしている。但しこれらは住持三宝に特化した「次第」ではないため、本稿では道宣の一つの特徴であると位置付けた。

6　『華厳経明法品内立三宝章』（大正四五、六一七中下）。但し法蔵の場合、三宝の「業用の優劣」を論じる際、「住持の用は僧最勝なり」（同六一七中）とし、はたらきについて見れば僧が最も優れていると述べ、道宣の説との類似性も見られる。

（平成二十四年度科学研究費補助金［基盤研究（c）］「道宣著作の研究」（研究代表者：大内文雄）の研究成果の一部）

〈キーワード〉　三宝、南山道宣、『四分律含註戒本疏』、『釈門帰敬儀』

（大谷大学非常勤講師・博士（文学））

NII-Electronic Library Service